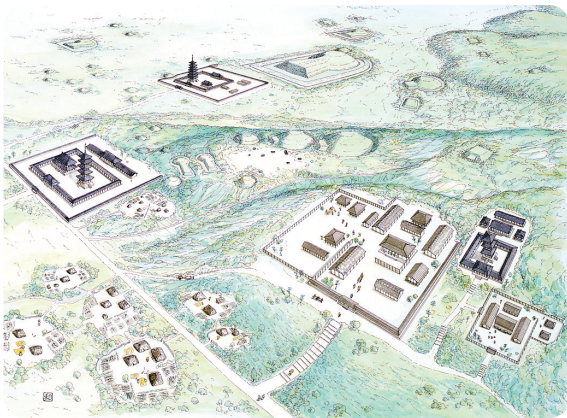


山城の古代寺院

古墳時代の権力者は、政権が安定すると古墳を造営するという意図が薄れたようで、徐々に新たに造られる古墳の規模が小さくなっていきます。代わって、古墳を造る労力を運河や水路といった生産に係わる土木工事に振り分けていきます。そして、6世紀に日本(倭国)には中国・朝鮮半島から仏教が伝わります。時の権力者は古墳を造るということから、仏教を護持し自らの寺院を造営するという意識へと変えていきます。

わが国で最古の本格的な寺院は、奈良県明日香村にある飛鳥寺と言われています。文献によると飛鳥時代には全国に百余りの寺院・草堂があったようです。これらの建物では屋根に瓦が葺かれている場合があり、柱を据えるための礎石や瓦が出土する遺跡を寺院跡と考えることができます。遺跡の調査で新たに見つかった場合の寺院跡は、文献にその寺院の名称が記されていないので、「○○
は い じ
廢寺」と呼んでいます。寺院跡は、一町(約120m四方)もしくは二町四方の区画をもつことがあります。このような広大な寺域をも



久世郡に建ち並ぶ寺院の想像復原図
(早川和子作画：城陽市歴史民俗資料館提供)

つ寺院跡の全容が1回の調査でわかることはほとんどなく、発掘調査を長い期間にわたって続けることがほとんどです。最初は不明確であったものが、調査を重ねることにより寺域のなかの建物配置や寺の変遷などがわかってきます。

京丹後市^{たわらの}俵野廢寺では

瓦の分布、礫を敷いた場所が見つかっています。これまでに礎石も見つかっていることから寺跡と思われるのですが、寺の全容はわかりません。



京都府南部、南山城地域では現在、古代の寺院跡

は20数か所確認されており、このうち飛鳥時代創建の寺院として、^{うずまさこうりゅうじ}太秦広隆寺と並んで府内最古の寺とされる木津川市^{こまでら}高麗寺跡や城陽市^{くぜ}久世廃寺があります。高麗寺跡は、整美な瓦積基壇の金堂（西）と塔（東）をもつ^{ほつきじしきがらんはいち}法起寺式伽藍配置の寺で、朝鮮半島からの渡来人によって建てられたと考えられています。近年の発掘調査により、^{はくほう}白鳳期（7世紀後半）に伽藍の整備が行われたことが判明し、屋根の両端に^{しび}鴟尾をのせた南門跡も見つかっています。かつての久世郡の中心部である城陽市周辺には久世廃寺のほか、^{しょうどう}正道廃寺、^{ひらかわ}平川廃寺、^{ひろの}宇治市広野廃寺の4つの寺跡が集中して分布しています。久世廃寺は、^{しゃかたんじょうぶつ}法起寺式伽藍配置で金銅製の^{きぶみ}釈迦誕生仏が出土しています。平川廃寺は、一辺17mを越える七重塔級の大規模な塔基壇をもつことで知られ、白鳳期（7世紀後半）に建てられ、奈良時代には周辺の寺と一緒に大規模な修復が行われたようです。久世廃寺は久世郡の豪族^{くりくま}栗隈氏、平川廃寺は渡来系氏族の^{きぶみ}黄文氏の氏寺と考えられています。

南山城地域の寺院の多くは、古代最大の争乱「壬申の乱」で勝利した天武天皇側に味方して功績をあげ、その恩賞として国から氏寺の建立や修復に際して援助を受けたとする説があります。さらに南山城の寺院は渡来系氏族と深い関連があったとも考えられています。

（辻本和美）